

◆子ども創作能とは…◆

日本が誇る古典芸能である能を、子どもたちに演じてもらう試みです。地元・伊豆の国に伝わる伝説・民話や歴史的な事件を題材にして書き下ろされた、新作の台本をもとにして、地元の小中学生や幼稚園児が舞台狭しと大活躍！プロの能楽師が指導に当たると、全国でも当地でしか行われていない画期的な催しです。子どもたちの熱演をぜひ温かく見守ってあげてください。

◆演目解説◆

仕舞

仕舞は能の一場面（多くはフィナーレの部分）を面・装束・囃子を用いずに着物で舞うものです。今回は子ども能作能では地謡（合唱）を勤める小学1〜4年生が、古典の能の名作を舞います。



玄象（げんじょう）

琵琶の名手、藤原師長もろながは、須磨浦で出会った塩屋の老人が弾く琵琶のあまりの見事さに自分の未熟を感じる。老人はじつは村上天皇の霊で、その夜本当の姿を現した天皇は龍宮にある琵琶の名器を師長に与え、ともに樂を奏する。

小督（こごう）

高倉天皇の寵姫の小督こごうのつぼね局は、平清盛の策謀に身の危険を感じて失踪する。嘆き悲しむ高倉院に派遣された臣下の源仲国が小督の行方を探すと、果たして嵯峨野で小督が弾く琴の音が聞こえてくる。中秋の名月の下二人はしばし笛と琴の合奏をするが、都へ帰らないと心に決めた小督の手紙を携えて仲国は二人都へ帰ってゆくのだった。

猩々（しょうじょう）

唐・揚子江のほとりに住む親孝行の高風は、市で酒を売れば富貴の身となるだろうという夢を見る。市に現れた童子は猩々という酒の精だと名乗り、高風を江に誘う。やがて現れた猩々は酒に酔って水の上を舞い遊び、尽きない酒壺を高風に与える。

吉野天人（よしのてんにん）

桜が満開の吉野山。名所の桜を見ようと訪れた都人の前に現れて、ともに花を眺める里女は、じつは天女だった。名月の下、桜の梢に現れた天女が優雅に舞を見せる。

子ども能作能 伊豆の頼朝（いずのよりとも）

平治の乱に敗れて蛭が島に流された源頼朝は、北条家や伊豆の豪族の庇護を受けて平和に暮らしていたが、治承4年高倉宮の令旨を受け、また後白河法皇の院宣を受けて平家打倒のために挙兵した。その目標は平家の伊豆目代だった山木兼隆に定められ、8月の三島大社の祭礼の日、山木の軍勢の多くが出払っていた際に乗じて山木館を襲撃した。5年に渡る源平合戦、その後の頼朝による鎌倉幕府の開設の端緒は、この伊豆で開かれたものである。

装束付舞囃子 井筒（いづつ）

子どもたちの指導をする講師の能楽師による演目は、能『井筒』のダイジェスト版の上演です。諸国を巡って修行する僧（ワキ）が訪れた廃寺に現れる一人の女（シテ）は、死後も恋人である在原業平を忘れられずにいる紀有常の娘の霊でした。業平を想ってしばし懐旧の舞を見せる女も夜明けとともに姿を消し、僧も夢から覚めるのでした。夢と現実とが交差する、不思議な美しさ持つ能の名曲です。